渤海国旅遊路の開発整備に関する研究（その２）

青　木　雅　明（東洋大学）

１．前回大会における報告の主旨

前年の環日本海学会第８回学術大会第３分科会：観光（2002年10月26日）において同じタイトルの報告を行ったが、その要旨は青木雅明『渤海国旅遊路の開発整備に関する研究』「環日本海研究第９号」（2003年10月）93～95頁に掲載された。今年の第９回学術大会第五分科会：環日本海歴史・自然・環境（2003年９月28日）における今回の報告は、同じ研究の継続について報告したものである。このため、まず前回報告の主旨を述べる必要が感じられる。

観光は日常の生活地域を離れて旅をすることによって成り立つが、旅行先に好ましいモニュメント（記念碑、歴史的遺産）があれば、それは人を過去の想像の世界へと旅立たせ、観光に深みと興奮を付加する。渤海王国（698～926年）の歴史的遺産は、中国東北地方を中心とする北東アジアの広い地域に散在しているが、これはそうした意味で魅力的である。

渤海王国の使者は千年以上前に季節風と海流を利用して日本海を渡り、日本の平城京、平安京などと頻繁に交流したため、日本人旅行者にとってこの国は特に親しみが持てる。また、韓国人旅行者にとってもこの国は高句麗王国と並んで特別な関心を惹く存在である。それらの上に立って、もし「研究され、復元されつつある1100～1300年前の渤海王国」または「実物大で再現される北東アジアの古代国家」というコンセプトを打ち出せば、グローバルな観光需要を引き出す可能性がある。

そこで、航空路、幹線鉄道および高速道路によって連結された東京＝大阪＝ソウル＝大連＝沈陽＝長春＝ハルビン＝新潟＝東京という北東アジアの大都市回廊に、渤海王国の遺跡･遺物が広く埋蔵された地域を接続して、旅遊路（観光ルート）を構成することが考えられる。

これによって、観光客は大都市の高水準かつ多様な都市サービスや特色ある都市文化を享受する一方、古代渤海王国への旅遊を楽しみ、観光効果が著しく高まるものと考えられる。こうして、日本海を囲んで日本列島、朝鮮半島南部、中国東北地方を巡る観光ルートに、推定48万平方キロメートルの古代渤海王国を組み込む構想が生まれた。

この構想を実現するうえでは、①遺跡・遺物の存在状況を全体的に把握すること、②遺跡遺物の研究・発掘・復元を進行させつつ旅遊客を迎え入れ、十分な展示および解説サービスを行う方法を確立すること、③安全・清潔・簡易・低廉な休憩宿泊施設や歩道･輪道を先行整備する一方、新型交通施設や自然エネルギーを導入して環境悪化の少ない観光活動の先行事例をつくること、④開発整備の過程では考古学、古代歴史学、観光学、経済学、地域計画・実践、社会奉仕などのフィールド教育を組み込むこと、などが望まれる。

この構想では観光が学術と融合される。広い地域に残された歴史的遺産を研究、発掘、復元し、また必要な施設を整備することによって、古代渤海王国への旅遊を可能とする。それは人々の知的な好奇心と探求心を刺激し、内外の観光客を楽しませ、同時に観光産業を核にして地域全体を整備・振興させる可能性も高い。そこで、こうした事業の全体を「渤海王国の再現をモティーフとす

る学術観光地域の整備振興」と呼び、これを簡略にして「渤海王国再現事業」と呼ぶことにする。

2．第1次現地調査とその結果

この研究の次のステップは、上記のような構想についていくつかの視点から実現可能性調査（フィージビリテイ・スタデイ）を行うことである。地域の概観調査と地域社会の実行意欲の把握に主眼を置いて、第1次の現地調査を2003年9月10日(水)から15日(日)までに行った。なお、これは、中国における新型肺炎の流行を主因として6月に予定した調査が大幅に遅れたものである。筆者も所属する北東アジア観光研究会と環日本海経済研究所のメンバー6名がこれに参加した。

吉林省の延吉空港、長白山、延吉市および琿春市、東京竜原府遺跡、琿春市～牡丹江市間270キロメートル（古代渤海王国の「日本道」の経路)、寧安市渤海鎮、上京竜泉府遺跡、牡丹江空港などを視察したほか、延辺自治州政府、琿春市、黒龍江省、牡丹江市の要人と面談した。渤海王国遺跡の観光への活用というテーマでは、延辺自治州政府、琿春市は歴史的遺産の管理が中央政府の所管であることを理由に何も答えなかったが、黒龍江省、牡丹江市は予想以上に積極的であった。このテーマについては、各レベル政府の旅遊局（観光行政の所管）と国務院文化部文物管理局を頂点とする各レベル政府の文物管理組織（歴史的遺産管理の所管）との間で調整を行う必要がある。

3．これまでの研究で明らかになった点

渤海王国再現事業は遺跡遺物が広い地域にさまざまな状態で分散しているので、全体計画を同時全面的に実行するのではなく、フィージビリテイ（実現可能性）の高い部分から着手し、逐次進めて行くのが適当である。上記の現地調査の限りでは、上京の復元とその周辺整備を優先するのが適当のように思われる。

渤海王国の遺跡を学術目的と併せて観光にも活用する視点から見ると、遺跡の復元を本格的、早急に行わなければならないように思われる。渤海王国の研究者は吉林省、黒竜江省を中心に100名以上にのぼるともいわれているが、併せて復元の技術者・技能者を確保することが緊急課題となろう。

現在奈良県は2010年の平城京遷都1300年記念事業を準備している。往時の平城京・渤海王国交流の実績をかえりみると、渤海王国を継承する地域がこの記念事業にどのような関わりを持つかも軽視できない課題である。

COMMENT

川端俊一郎（北海学園大学）

「人は時の流れを遡ってもうひとつの旅をする」とはいい表現です。そしてこの「第2ステージの旅程における楽しさと興奮が大きければ大きいほど、旅行の全行程の価値は増大する」というのもそのとおりです。しかしこの第2ステージとは、単なる観光、sightseeing という第1ステージと一体化しており、不可分なものでしょう。第1と第2とは、ステージが違うというよりも、同じ旅行の二つの側面だとみることができます。

ステージが違うのはこだわりの旅でしょう。はじめはスイスへ行けばそれで満足でしょうが、そのあまりにも調和した自然と人との営みに飽き足らず、こんどはもっと自然のままの、例えばアルタイ山脈のカナス湖へ行ってみたいと思うようになる。歴史にこだわる場合も同様で、はじめは始皇帝の兵馬俑とか、三蔵法師のお寺を見たいでしょう。しかしそんなに何度も見るものではありません。そこで今度は高句麗の広開土王碑とか渤海

国の何かを観てみようかとなります。

そうだとすると、報告者が前提としているような、渤海国の遺跡が「日本の旅行者にとっては、同時代の唐の遺跡より親しみが持てる」という評価には疑問が出てきます。たしかに渤海使の往来は遣唐使の往来よりも数の上では倍以上にもなります。しかし日本の文化に与えた影響という点では、遣唐使にはとてもかなわないのです。

唐と白村の江で戦って破れたあとの唐文化の導入は、アメリカに敗れたときと同様のものがあります。新憲法はアメリカ製となりましたが、奈良時代の日本の律令は唐の律令をそっくりそのまま導入したものでした。中国では唐代の律令の多くは失われたので、日本に残っている律令でそれを復元できるほどなのです。尺度も唐のものになりました。小尺の１尺２寸を大尺とするという規定も、そのまま日本に入ってきます。それまでは中国南朝の小尺が使われていましたが、今度は唐尺に置き換えられます。法隆寺を唐尺で測っては寸法が合わなかったのも当然です。法隆寺はその年輪から、定説よりも百年以上古いことが判明しました。そこで古い南朝尺で測ってみると寸法が合います。そうしたことが分かるとまた現存する中国の古い寺院をみたくなります。渤海国も研究が進めば興味が増すでしょう。

しかし渤海国の旅行とは新しい需要を掘り起こすことにほかなりません。その遺跡は主要な観光地からは遠く孤立しています。「既に消滅した過去の世界に旅遊」しようにもいまは何も無い渤海国の城跡なのです。そこで、失われた渤海国の遺跡を復元しようとの提案がなされていますが、かつてかの地を支配した少数民族の王国復元と、採算の取れる観光業の成立とは、直接には結びつかない事業のように思われます。